

古墳時代

権力の象徴と統一国家への道のり

「古墳時代」は、「前方後円墳」を中心とした「古墳」がさかんに作られた時代であり、以前は「大和時代」とも呼ばれていました。奈良時代が始まる和銅三年（七一〇）までを含みますが、聖徳太子が活躍した六世紀末以降を「飛鳥時代」、大化の改新（六四五）以降を「白鳳時代」と呼ぶこともあります。

弥生時代から見られるようになった階級差から、土地や労働力などを豊富に有し、地域で権力を持つ一族や集団「豪族」が形成されていきます。その中心人物が葬られる墓「古墳」は、その権威の象徴ともされ次第に大型化し、棺やそれを納める石室・墓壇には鏡や刀剣などの副葬品が納められました。墳丘上や周りに埴輪を並べるものもあります。弥生時代にも方形周溝墓など墳丘墓は造られていましたが、三世紀中頃から鍵穴形の「前方後円墳」が出現し、これを古墳時代の始まりとしています。

各地の豪族は、近隣豪族との争いや交流を重ねて次第に広い範囲で組織化されていきます。古墳時代中期には、「ヤマト王権」（大和朝廷）と呼ばれる近畿地方の豪族集団が、九州から東北地方に至る範囲に勢力を伸ばし、その首長が「大王（おおきみ）」と呼ばれました。大阪府堺市の大仙古墳（仁徳天皇陵）など、大型化した前方後円墳は、その支配の広がりを示していると言われます。

古墳時代後期には、政権が定着し権威誇示の必要性が薄れたこと、首長以外の有力層の成長などから、前方後円墳は減少していきます。そして、大型の円墳や方墳が造られ、小・中型の古墳の密集地「群集墳」も各地に見られるようになります。



古墳時代後期の古墳群（想像図）

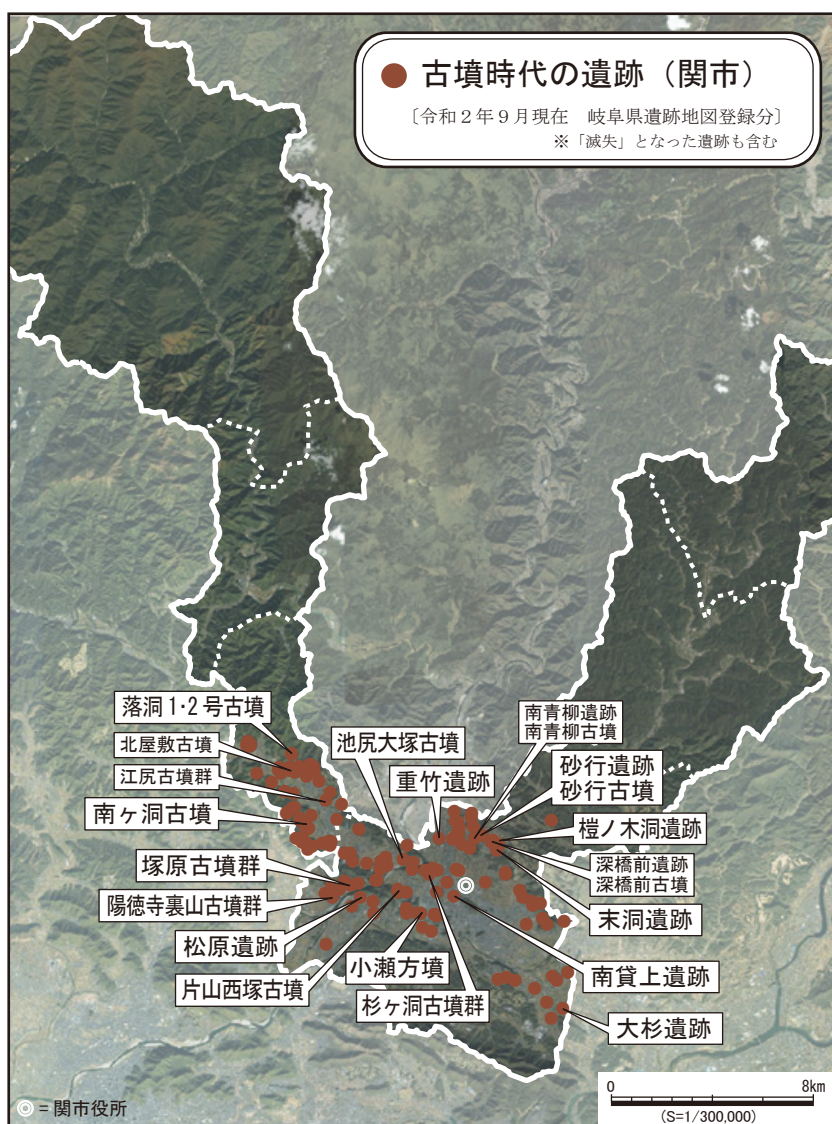


副葬品〔銅鏡〕
（陽徳寺裏山1号古墳）

関市の古墳時代

古墳時代の登録遺跡のうちの八割は古墳であり、古墳数としては約三〇〇基に上ります。そのほとんどは旧関市内及び武芸川町に存在し、長良川流域と武儀川流域に集中しています。古墳は主に平地や小丘陵に築かれたため、自然条件的に他の地域は向かなかったのか、当時の風習や社会体制の違いなのかは、調査事例が少なく定かではありません。未登録・未調査ですが古墳と言えらるる場所もあるため、今後の調査・研究が待たれます。

皇位継承をめぐる壬申の乱（六七二）で活躍した「ムゲツ氏」の存在から、この地域も中央政権と関わりを有していたことは確かなようですが、市内の古墳のほとんどは方墳と円墳であり、前方後円墳が市内では一基しか見られません。中央との関係性やその時期を示す地域の特色の可能性が考えられます。また、大杉遺跡や重竹遺跡など、古代にかけての集落地が形成されていく時代でもあり、これらの集落と政権との関係なども今後解明していきたい課題の一つです。



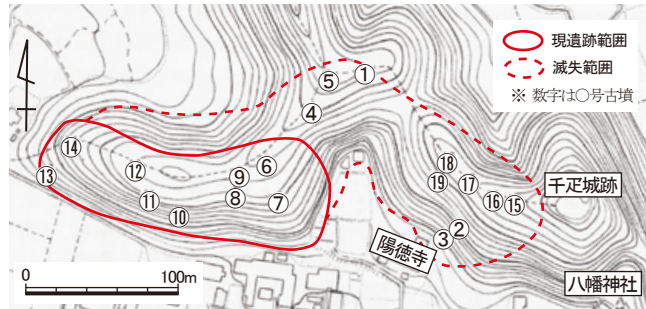
※ 遺跡名は、図録や展示で紹介している遺跡のみ表示しています。

陽徳寺裏山古墳群（千足）

千足大橋の北西側、長良川右岸に北から延びた丘陵の南斜面に位置する古墳群です。一九基が存在しましたが、開発等により滅失し、現在は半分程が残存しています。昭和一二二年（一九三七）には当時の陽徳寺住職による石室内の調査、昭和三九年（一九六四）には南山大学による調査が行われていましたが、昭和五〇年（一九七五）、宅地造成に伴い、関市教育委員会が中央北部の一・四・五号古墳の発掘調査を行いました。



副葬品（一・四・五号古墳）



陽徳寺裏山古墳群 古墳位置図

代前期、四世紀後半の築造と思われます。現在のところ市内では前期古墳は他に確認されておらず、市内最古の貴重な調査事例とされています。墳丘の大半は削平されていましたが、埋葬施設は残存しており、墳丘の頂上に二つの墓壇が残り、木棺を直接埋めた木棺直葬と思われま。墓壇内の底面には赤色顔料が堆積しており、その内外から刀子や鉈（やりがんな）、鍬先状鉄器などの農工具鉄製品、勾玉・管玉・丸玉などの玉類などが出土し、人骨片や木炭片も残存していました。

五号古墳は、古墳時代前期、四世紀後半の築造と思われる。現在のところ市内では前期古墳は他に確認されておらず、市内最古の貴重な調査事例とされています。墳丘の大半は削平されていましたが、埋葬施設は残存しており、墳丘の頂上に二つの墓壇が残り、木棺を直接埋めた木棺直葬と思われま。墓壇内の底面には赤色顔料が堆積しており、その内外から刀子や鉈（やりがんな）、鍬先状鉄器などの農工具鉄製品、勾玉・管玉・丸玉などの玉類などが出土し、人骨片や木炭片も残存していました。

他の古墳はすべて古墳時代後期のものと思われる、ほとんどが円墳でしたが、一号古墳は、円丘に小さな方形の張り出しが付いた「帆立貝式古墳」であることが判明し、墳丘面を覆う葺石（ふきいし）も一部残っていました。天井部は削平されていたが、横穴式石室であり、短い羨道から両袖式の玄室が広がります。須恵器、鉄製品、玉類などが出土していますが、須恵器類には時期差があり、一世紀程の間、追葬が行われていた可能性が考えられています。

銅鏡（珠文鏡）や子持器台（装飾器台）など、出土例の少ない貴重な遺物も多く、角坏は現在のところ県内唯一の出土例です。角坏を焼いた窯は福井県美浜町に存在し、福井ゆかりの継体天皇の動向との関わりも注目されています。



須恵器【子持器台・角坏】



陽徳寺裏山1号古墳 石室



古墳に埋められた生活や文化

被葬者の埋葬には、竪穴式と横穴式があります。竪穴式は、上から掘り込んだ穴に棺を埋葬し、天井石や盛土で蓋をするもので、一度塞ぐと開けることはなく基本的には一人の埋葬となります。石室を設けるものやそのまま埋めた木棺直葬などがあります。古墳時代後期に普及した横穴式石室は、石材で棺を納める部屋（玄室）を造り、外部からの通路（羨道＝せんどう・えんどう）を設けたものであり、埋葬後出入口を塞ぎますが、それを取り除けば再び入ることができ、祭祀や追葬（家族など別人物の埋葬）が行われたものと思われます。

石室や墓壇内の副葬品は、鏡や玉類など祭祀・呪術的なものが多いですが、権力争いが激化する古墳時代中期には鉄鍬や鉄剣などの武具も多くなり、後期には須恵器も増加します。石室内に壁画などを描いた古墳もありますが、東海地方では見られず、墳丘周囲の埴輪も市内では確認されていません。

古墳やその副葬品は、当時の生活等を映し出す貴重な資料ですが、残念ながら盗掘などにより失われているものが多いのも現状です。



横穴式石室
（塚原7号古墳）



竪穴式石室



横穴式石室

古墳時代

片山西塚古墳(片山遺跡)(小瀬)

長良川左岸の小丘陵北東裾部に位置する古墳です。東側には円墳の片山東塚古墳があり、古墳下には縄文時代の遺構も存在します。

片山西塚古墳は、現在のところ関市内で唯一確認されている前方後円墳であり、市指定史跡とされています。平成一五年(二〇〇三)の調査により、墳丘の盛土や葺石、墓壇や墓道、周壕などを確認しました。竪穴状の木棺直葬と推定され、古墳時代中期、五世紀中頃の築造と思われます。



推定復元図

小瀬方墳(山王通西)

東海北陸自動車道と旧国道二四八号線が交差する地点の北東側に位置します。

一辺約二三m、三段築成の方墳です。発掘調査が行われていないため、その構造は不明ですが、周辺では陽物形の石製品も採集されています。築造時期も不明ですが、美濃地方各地の有力豪族の墓に大形方墳が造られた七世紀前半の可能性が考えられています。池尻大塚古墳などと共に、弥勒寺官衙を治めたムゲツ氏との関連も推定されます。



小瀬方墳 (市指定史跡)

塚原古墳群(千足)

千足の塚原遺跡公園は、縄文時代の建物に加え、一二基の古墳も復元してあります。縄文早期・中期・古墳後期の三つの時代の痕跡が残る市指定史跡公園です。

塚原遺跡は、古墳時代には墓域となり、公園内外で三七基の古墳が残ります。昭和六二年(一九八七)には開発区域内の一六基の調査が行われ、そのほとんどは古墳時代後期の円墳と思われ、石室は南向きに開口しています。

一号古墳は、調査古墳の中では最も古いのと思われる、六世紀後葉の築造と思われます。背面を中心に周溝が巡り、二段築成の墳丘は、前面に葺石が残ります。横穴式石室は、玄室が羨道より一m程低くなった特殊な造りであり、玄室内からは、坏・蓋・高坏・提瓶(水筒形の容器)・甕(はそう)小孔を有する注器などの須恵器のほか、土師器・刀子・鉄鏃が出土しています。



塚原古墳群 (塚原遺跡公園)



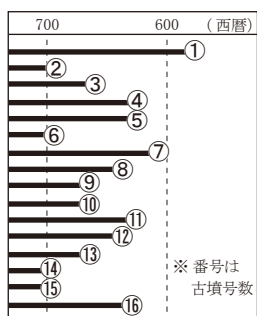
塚原1号古墳



石室内 出土状況 (塚原1号古墳)



副葬品〔金属製品〕
(1・5・7・8・9・11・12号古墳)



各古墳の築造時期 (推定)

二・一四・一五号古墳は、羨道や入口がなく、竪穴式石室と推定されますが、二号古墳の奥壁には二個の円礫が縦におかれており(鏡石)、他の横穴式石室と似た造りになっています。いずれも小型で、追葬を行っていないものと思われます。

他の古墳は横穴式石室であり、玄室が羨道よりやや広がる両袖式のものが多いですが、同じ幅で直線的な側壁になる無袖式のものや、羨道がないものも見られます。また周溝も、両脇に括弧形に掘られるものと、背面から馬蹄形に掘られるものがあります。こうした古墳や石室の形状に加え、出土した須恵器の型式などから、古墳時代後期の中でも、その築造時期にはやや差があるものと推定されます。今後、調査区域外や周辺の古墳の調査により、古墳群の性格や消長がさらに解明されていくものと思われます。

塚原古墳群を含む千足地区では、五つの古墳群など八〇基以上の古墳が存在し、背後の丘陵東へ北側にかけても二〇基以上が存在します。下有知から武芸川町までを含めると市内の古墳の九割以上が集中しており、池尻に存在した武義郡衙(弥勒寺官衙遺跡群)との関連も窺われます。



塚原2号古墳

杉ヶ洞古墳群（下有知）



杉ヶ洞1号古墳

長良川左岸の向山丘陵南斜面に位置する遺跡です。円墳七基から成る古墳群とされていましたが、開墾等により滅失し、残存する一号古墳の調査を、昭和五六年（一九八一）、自動車道建設に伴い、岐阜県教育委員会が実施しました。

墳丘は削平を受けていたものの、葺石の痕跡は一切確認できず、表面に葺石を敷いていなかったものと思われる。南に開口する横穴式石室であり、羨道から玄室に入ると西壁側だけ広くなる片袖式と呼ばれる形状になっています。天井石は残っていませんが、玄室内で確認した厚さ四〇～六〇cmの石材がその破片と推測されます。

玄室床面上では、副葬品として、坏・蓋・高坏などの須恵器・耳環・鉄鏃・刀子などの金属製品のほか、水晶製の切子玉や碧玉製の管玉、硝子製の丸玉などの玉類約七〇点も見つかっています。

六世紀中葉～七世紀前葉、古墳時代後期の築造と思われる、墳丘下では弥生時代の土坑も三基確認されています。



副葬品（切子玉・管玉・丸玉）

池尻大塚古墳（池尻）



池尻大塚古墳（国指定史跡）

池尻山の南西支尾根の裾にある古墳です。石室の石材が露出しており「美濃の石舞台古墳」とも呼ばれます。弥勒寺官衙遺跡群の西端にあり、古代の武義郡を治めたムゲツ氏の墓と考えられています。

平成二〇年（二〇〇八）及び平成二三年（二〇一一）に発掘調査が行われ、天井石を取り外して石室内部も調査しています。一辺約二三～二五mの方墳で、二段に築成されていた可能性があり、前面をやや西に傾けた不整な方形をしていることがわかりました。

南西方向に開口する横穴式石室であり、羨道は「ハ」の字形にやや開きます。玄室の床面には扁平な川原石を敷き詰め、側壁や天井石に中々大型の石材を並べています。奥壁の両側床面には土師器小壺と須恵器坏蓋が埋設されており、床面で鉄地金銅張飾金具も見見しました。胡録（ころく）矢を入れる道具）または馬具の一部と考えられます。古墳時代後期、七世紀前半の築造と推定されています。



玄室の側面・底面



てつじこんどうばりかざりかなぐ
鉄地金銅張飾金具

落洞一・二号古墳（武芸川町小知野）



落洞1号古墳

権現山から広がる山地の山麓、西洞谷川左岸に位置する古墳です。

一号古墳は、墳丘高約四m、周囲約四七mの円墳であり、武芸川町内では最大のもので、羨道や玄室も良好に残る横穴式石室ですが、盗掘のためか遺物は確認できていません。その南方にある二号古墳では、坏や蓋、高坏など、七世紀中期の須恵器片が出土しているため、一号古墳も古墳時代後期の築造と推定されています。

南ヶ洞古墳（武芸川町跡部）



須恵器（南ヶ洞古墳・北屋敷古墳）

武儀川右岸の段丘上、岐阜市境から広がる山地の山麓に存在した古墳です。宅地造成のため現在は滅失していますが、六世紀後半から七世紀初期の築造と推定される横穴式石室の円墳です。

昭和四四年（一九六九）の発掘調査では、壺や高坏などの須恵器や鉄刀が出土しています。

この他にも、北屋敷古墳（小知野）、江尻古墳群（高野）など、武芸川町では七〇基以上の古墳が確認されています。

古墳時代



山地斜面の一大集落

下有知北東部の丘陵地(現関テクノハイランド)周辺では、砂行遺跡、末洞遺跡、榎ノ木洞遺跡のほか、南青柳遺跡、深橋前遺跡なども存在し、古墳時代を中心に、弥生時代末から古代にかけての竪穴建物が400軒以上発見されています。弥生末～古墳初頭の方形周溝墓(深橋前)、古墳中期の砂行1号古墳や南青柳古墳、古墳後期の群集墳(砂行)が存在し、古代の須恵器や灰釉陶器の窯跡も存在するなど、各遺跡で存続時期に差はあるものの500年以上存続した集落地のようです。建物の大半は最大傾斜44度にも及ぶ斜面上に設けられており、平地の集落地とは異なる特殊な立地条件です。外敵に備える防御的な集落、谷間の水場を利用した祭祀に関する集落、窯跡など生産に関連する職人の集落など、諸説が考えられていますが、その成立の経緯は不明です。



竪穴建物群 (榎ノ木洞遺跡)

下有知北東部の丘陵地西側斜面に位置する遺跡です。平成八・九(一九九六・九七)年に岐阜県文化財保護センターが発掘調査を行い、弥生時代末から古墳時代初頭にかけての竪穴建物を五〇軒以上確認しています。丘陵頂部にある一号古墳は、表面に葺石を施し、造り出し部(墳丘に付する小突部)を有する円墳です。埋葬部の痕跡を二箇所確認しており、二回の埋葬が行われたようです。木棺直葬と思われるが、直刀や短甲などの武具や銅鏡(変形神獸鏡)の破鏡が残存しており、五世紀前半の築造と推定されています。



砂行1号古墳 (市指定史跡)

砂行遺跡・砂行二号古墳(のぞみヶ丘)

下有知北東部の丘陵地南向き斜面に位置する遺跡です。平成一二年(二〇〇〇)から七年間にわたる調査の結果、弥生時代から奈良時代にかけての竪穴建物を約五〇軒確認しており、縄文時代の炉跡や平安時代の灰釉陶器の窯跡も発見しています。

古墳時代後期には約四〇軒が存在し、集落の最盛期と思われます。やや先行して栄えた榎ノ木洞遺跡からの集落の拡大が考えられますが、榎ノ木洞遺跡ではあまり見られなかった掘立柱建物を一〇軒以上確認しており、集落の性格が異なっていた可能性も考えられます。



掘立柱建物 柱穴

末洞遺跡(尾太町)

榎ノ木洞遺跡(のぞみヶ丘)

末洞遺跡から小丘陵を挟んだ北側約二〇〇mの地点に広がる、丘陵地南向き斜面に存在した遺跡です。工業団地造成に伴い、昭和六三年(一九八八)には関市教育委員会が、平成八・一一年(一九九六・九九)には岐阜県文化財保護センターが発掘調査を行いました。

調査の結果、南向きの斜面上に古墳・平安時代の竪穴建物を一〇〇軒以上発見し、中世の水田跡も確認されています。土師器や須恵器、灰釉陶器などのほか、「美濃国」刻印須恵器や墨書土器、腰帶具(石丸鞆)などが出土しており、五世紀後半と思われる竪穴建物の床面では琴柱(ことじ)形石製品も発見されました。

古墳時代中期以降の竪穴建物は、建物中央の炉跡ではなく、壁際にカマドを設けるものが多くなります。

中央や両脇に石をおいて側壁や支柱(支脚)として、住居外に煙を出す煙道が溝状やトンネル状に掘られるようになります。中には土器を伏せて支脚としているカマドも見られました。



琴柱形石製品



土師器(甑・甕)



竪穴建物 カマド跡



「土師器」と「須恵器」

古墳時代から古代にかけては、土師器や須恵器が主に用いられます。

土師器は、弥生土器の流れをくむ素焼きの土器です。時代により呼称が異なりますが、弥生時代と古墳時代の境自体も不明瞭なため、明確には区別できません。そんな過渡期に、東海地方を中心に広く使用されたのが「S字状口縁台付甕」です。口縁の断面がS字形に屈折しており、主に煮炊きに使用されたと思われます。その他、平底甕・壺・高坏・器台・甑(こしき＝蒸し器の一種)などの器種が造られますが、土師器は文様のないものが多く、赤みがかった表面に

はハケメなどの調整の痕が残ります。

須恵器は、大陸伝来の技術と思われ、轆轤(ろくろ)を用いて成形し、地下式の窯(穴窯・登り窯)を用いて焼成した硬質の土器です。青みがかった灰色のものが多く、坏・蓋・高坏・壺・瓶・甕などの器種が造られます。当初は祭祀用や副葬品などに用いられた(祝部土器)ようですが、やがて食器などの日用品としても使用されるようになりました。



S字状口縁台付甕 (松原遺跡)



須恵器 (大杉遺跡)

重竹遺跡のA地点では、竪穴建物を六〇軒近く確認していますが、古墳時代の建物は、昭和五五年(一九八〇)にA2地点西調査区で二軒発見されています。S字状口縁台付甕が出土しており、古墳時代初頭の住居跡と思われます。A3地点の溝では、S字甕の流れをくむ古墳時代中期の宇田型甕も出土し、S字甕と共に当時市内では最初の発見でした。



土師器〔台付甕・高坏〕(A地点)

重竹遺跡 (下有知周辺)

松原遺跡の第一次調査では、古墳時代初頭の竪穴建物も三軒発見されています。S字状口縁台付甕や高坏、器台、長頸壺などが出土しており、三世紀後半頃の住居跡と思われます。

一号住居では、四本の柱穴と周溝が見られ、周溝部分と中央は高く残し、その間を深く掘っています。また、三号住居は、柱穴や周溝は不明ですが、中央は高く残して壁際一m程内側をやや深く掘っており、それを埋め戻した上に全面に床面を貼るという、また違った造り方がされています。



竪穴建物 (3号住居)

松原遺跡 (小屋名)

大杉遺跡では、古墳時代の竪穴建物を一〇軒以上確認しています。第二六次調査では後漢製の破鏡(内行花文鏡)、第一七次調査では線刻文の入った土師器、第二二次調査では装身具の素玉など、貴重な遺物が出土しています。第六次調査では遺構外で「美濃国」刻印須恵器も出土しており、これらの出土遺物などから、この一大集落地の性格や機能を解明すべく、整理・研究が進められています。



素玉



土師器〔線刻文土器〕

大杉遺跡 (大杉・西田原)

関市文化会館の約二〇〇m北、関市街地北部に位置する遺跡です。平成一三年(二〇〇一)以降五次にわたり調査が行われ、古墳時代の竪穴建物六軒、掘立柱建物二軒を発見しています。

竪穴建物では、S字状口縁台付甕や「く」の字状口縁甕、小型壺、高坏などの土師器が多数出土したほか、初期の須恵器(陶質土器)や編物石なども出土しており、古墳時代中期の住居跡と推測されます。また、鉄滓も多く出土しており、近辺に中世の鍛冶関連遺構の存在も考えられます。



土器出土状況

南貨上遺跡 (南貨上)